

平成17年7月  
四国支店

## 「日本政策投資銀行地域トーク in 香川」開催

### 今後の地方都市のあり方 ～創造都市高松を目指して～

弊行では7月7日、香川県における情報提供活動の一環と致しまして“地域トーク”を開催しました。今回は『今後の地方都市のあり方～創造都市高松を目指して～』と題し、まちづくりの観点から今後の地方都市をいかに魅力あるものにしていくかについて検討致しました。

(1)日 時 平成17年7月7日(木) 15:00～17:00  
(2)場 所 全日空ホテルクレメント高松

#### 1. 問題提起(弊行四国支店企画調査課長 三浦宏樹)

高松が直面する課題として、ストローク効果による四国域内での拠点性の低下や、高松都市圏における郊外化の進展による中心市街地のポテンシャルの低下傾向を指摘。また今後は、働き盛りである雇用者の減少により、商業床、オフィスとも需要のさしたる量的拡大は見込みにくいという状況を報告致しました。

#### 2. 講演(大阪市立大学院創造都市研究科教授 佐々木雅幸氏)

佐々木教授より「創造都市～都市経済のニューフロンティア」と題してご講演頂きました。

(以下講演要旨)「創造都市」とは、文化・産業面で創造性に富むと同時に、脱大量生産の革新的で柔軟な都市経済システムを備えることで、グローバルな環境問題やローカルな地域社会の課題を創造的に解決できる都市を意味する。

例えば、バルセロナではガウディを始めとする前衛的な建物があり、都市が現代の芸術を文化の個性として受け入れてきた。また工業都市だったスペインのビルバオでは美術館を建てることで都市再生をはかった。高松の北浜アリーのように、倉庫や工場をアート空間へ転換させる取り組みは、フランスやアムステルダムでも見られる。

そして日本から例をとると、金沢においては江戸時代から続く産業と技術の地域内相互の結びつきによって伝統産業や都市景観を守り、その地域に根付いた本社型の経済を発展させてきた。それにより独自の産地システムと文化資本を高めてきたと言える。

#### 3. トークセッション

(大阪市立大学大学院教授 佐々木雅幸氏・(社)香川経済同友会 木村大  
三郎氏・弊行四国支店長 廣田泰孝)

高松がどのようにして創造都市となり、街自体の賑わいを創出して

いくつかについて支店長の廣田を司会に、具体的な意見交換を行いました。佐々木教授からは「高松における創造性を持った取組みとして北浜アリーのような事例があることを知った。産業の面では、漆芸のような伝統工芸を、古いモノとして扱うのではなく、先端的なものづくりの観点から光を当てることで隠れた資源の再発見につながられるのではないか」と言った指摘がなされました。木村代表幹事からは「イベントの開催時以外は閑散としている中央公園を中心市街地のくつろぎのスペースとすべきではないか。また、玉藻城や県民ホールなどの施設を連携させることにより、人通りが絶えない空間にできないのか。」といった意見が述べられました。